

# 詩誌 立彩

*Rissai: A Journal of Poems*



第4号  
2013年8月

目次

|       |                                                                                       |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 伊東友乃  | 初夏 1<br>紫陽花 2<br>書けない言い訳 3                                                            |
| 栗山佳織  | 二月の終わり 4<br>火の中で 6                                                                    |
| 関根全宏  | 風旅 7<br>ふるえる 8<br>こもれば 9<br>道標 10<br>逢瀬 11                                            |
| 高間かさね | メ 12<br>つながり 13<br>南へ 14<br>恐怖の眼球 15                                                  |
| 戸張雅登  | ローマ再興<br>—アメリカ独立記念日を迎えてⅠ— 16<br>周縁に生きて<br>—アメリカ独立記念日を迎えてⅡ— 18<br>真昼の別れ 20<br>今日の夕飯 22 |
| 渡辺信二  | 魂を招く 23<br>九月に逝く者へ 24<br>遠いおまえ 25<br>花の精 26<br>後ろ姿—『風立ちぬ』にならって 28                     |

## 初夏

伊東友乃

わたしのなかで  
しずかに死んでいったものたちが  
きゆうに ふたたび  
生まれてくることを決めて  
初夏のひかりのなか  
いきおいよく  
はじけとぶ種となり  
ばらばらと  
わたしの身体に落ちてきた  
まあ新しい よい匂いをさせながら  
めいめい 自由に 産声をあげ  
芽をによきによきのばす  
指のさきつぼが  
かすかに くすぐったくなる

## 紫陽花

伊東友乃

うつかり　うつかり

人々が　あなたを見過ごしてしまうのは  
この白糸のような雨のなかで

あなたの色が　あまりにも  
よく　滲んでいるから

忘れさられた　淡い記憶や

ふと　とおりました憧れが

雨にまじって　しずかに　しずかに

ちいさな　花弁の

青となり　紅となり

持ち主の心に　染みとおっていく

その　あまりのさりげなさに

人々は　雨のなか　悲しくなる理由の犯人が  
あなただとは　けっして分からないのだ

## 書けない言い訳

伊東友乃

愛している人のことを題材に

詩を書くことは難しい

それが またこちらも

愛されているとなると よけい難しい

書く必要性がとくに見当たらないと言えば

それまでなのだけれど

やたら美しい言葉をちりばめてつくってみても

それはもう お互い 恥ずかしいくらいの嘘になり

だからといって

いつものように生活感まるだしだと

面白い話しにはなっても 詩にはならないでしょう

バランスが非常に難しいわけで

そんな簡単に 僕のこと書いて と言われても

書けないの あなたのことは 辛いけど

## 二月の終わり

栗山佳織

幼なじみでもないのに

ずっと一緒にいたような触れ方をする

二月の終わりは

梅の花も咲き始めて一日が長くなる

縁側に置いたままになっていた貝殻に

雨水が溜まり 土もすこし溜まって

小指の爪先くらいの二葉が出ている

こんな季節には

保留になったままの約束をもう一度ひらいて

あなたの返事を聞いてみたい

日が傾きかけた庭の隅で

土を掘る

しゃがんだあなたの後ろ姿に

近いような 遠いような

見知らぬ背中を重ねて見ていた

あの日

答えたくない約束を

あなたは上手に誤魔化して

若木と一緒に埋めてしまった

そのとき触れた

カーディガンのほつれた袖には

消息不明の兆しが揺れていた

「春が来たら会いに行ってもいいですか」

一人きりの二月の庭に番の鳥がやって来た

## 火の中で

栗山佳織

あの日から  
寝ても覚めても  
ぼうぼうとした火の海鳴りが  
彼女の耳を離れない  
誕生日から今日までを  
毎日数え直しては  
ありえたはずの  
あの子の時間を描く  
鮮やかであればあるほど  
海鳴りは激しく  
たちまち渦に巻き込まれ  
暗闇になる

彼岸にいるあの子の小さな手が  
ただれた彼女の耳をそつと撫でる



## 風旅

関根全宏

内気な風は旅好きである

朝になると夜明けの鳥の後を追いつ

とぼとぼと穀物を運ぶ農夫を見れば

そつと寄り添い野路（のみち）を進む

その風は 空高く陽が昇るころには

ふわつととんでまい上がり

波間にたゆたう小舟のように

雲一つない青空に しばしただよい息をつく

夕暮れ時 重たい櫓の扉の前に

悲しみに暮れる女があれば

その風は 新しい風景をそつと差し出し

そのかわり まことの言葉を受け取り

月明かりの中 もとの寢床に帰っていく

その姿のなんと誇らしげなことか

ふるえる

関根全宏

おまえの視線が囲炉裏におち  
熱にふるえ おれをみつめる  
そのそばで 2匹の山女魚がじつと焼かれ  
哀しみにおれはふるえる

あらゆる辛苦の結果

おまえはこの世の言葉を失い  
おれをおれとも認めなくなり  
遙より彼方 無の世界にいつてしまった

そんなおまえをみつめられず  
おれも視線を囲炉裏におとす  
火の中でなら ふたり おれとおまえは  
亦 見つめあうことができるのだろうか

あゝ 鴉も鳴き 夜風も絶えた  
いま おれを呼ぶおまえの声が 耳元で戯れている

## こもれび

関根全宏

太陽の光が 木の葉の透き間を通り  
ちいさな光になり この道に落ちてきた  
その光は追憶の光 淡く  
ゆらゆらと まどろみへと誘う

そのまどろみの底に積もった過去の時間  
眠っていた白い塵 それらが攪拌され  
おまえは 惜別をはこぶ春風にのり  
おれに触れ おれのなかを通りぬけていく

だが おまえの顔は おれにはみえない  
ただ 膨らんだり萎んだり いつか平等に  
いっさいの生の装飾を 剥ぎ取っていくのだ

そのとき あの枝で休息する一羽の鳥は  
死よ おまえの姿を  
捉えることができるのだろうか

## 道標

関根全宏

わたしの欲しいものは  
手を伸ばせば遠のいた  
わたしの愛しいひとは  
近づけば去っていった

いつか過去に立ち返るとき  
唇を噛みしめるおまえに  
身をまかせて寄り添えるものなど  
ひとつもなくてもいい

心張り裂ける哀しみがあれば  
それに打ちひしがれるがいい  
失ったものは全てみな

息子よ おまえを導く地図となり  
おまえは おまえの立ち位置を知るだろう  
それが 孤独になるということだ

逢瀬

関根全宏

澁みなき夕暮れに思い出す

おれはひとり酒を呑み

おまえはひとつ針をもち

おれの背中をじつと視ていた日のことを

否 おれの往く道に

懐かしさはいらぬ

ただ もうすぐ

おまえの眠る暗がり

おれの魂は

時間の本性に出会

おまえにおさな児のことを話し

いま歩いているこの道を

またひとり還るのだ

おれのなかにおまえが満ちて

メ

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

つながり

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

南へ

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)



# 恐怖の眼球

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

## ローマ再興

「アメリカ独立記念日を迎えて」

戸張雅登

ようこそアゴラへ 商売自由 言論自由

英語を話して ドルを落としてくれるなら

民族も宗教も不問にしよう

君も今日から九十九パーセントの仲間入り

いやいやパーセントの方になりたいって？

まずはマクドナルドで腹ごしらえだ

そのあとハリウッド映画でも見れば

そんな馬鹿な考えは忘れてしまうから

王政から共和制へ 帝政は東西分裂して消滅

新大陸で甦った共和制 有事の際は独裁官

元老院はローマを脅かすものを許さない

世界中に派遣された軍隊 最近のお気に入りにはブレデター  
ターゲットは塵に還り イーグルの紋章は不滅なり

君も市民権を得たいならローマ支援軍に入隊だ  
兵役を務めあげれば 世襲の市民権を授与しよう

周縁に生きて

—アメリカ独立記念日を迎えて—

戸張雅登

アメリカ内外で収奪した富で 肥えた一部の市民が  
私費で公共施設を建てる 国費は空っぽで  
図書館や大学 病院 美術館は彼らのおかげ

D.C.から遠く離れた極東には マッカーサー属州総督  
カルタゴ同様焦土にされたが 今は金の卵で  
ロシア帝国と中華帝国とのフロンティア  
三万八千四百五十の駐留軍が内と外に目を向ける

蛮族が攻めてきたときに彼らが守るのは  
一にアメリカ市民 二にアメリカ永住民  
三にアングロサクソン諸国民 四にその他

属州民はハンバーガーとバラエティ番組で  
脳がスカスカになっている

隷属状態への憤りは 隣国への憎しみに誘導され  
近くの同胞よりも 遠くの支配者を愛す

## 真昼の別れ

戸張雅登

今日は彼女の誕生日  
二人で食事をする前に  
向かった化粧品売り場

介護で荒れた手を取って  
オーガニックオイルでマッサージ  
仕上げるにハンドクリームをそつと塗った

喜ぶ彼女の手は いつもと同じ温度だった

支払う僕はサインをして  
隣の彼女の視線を意識した

エレベーターで最上階 大好きなビュッフェ  
もりもり食べる僕に 終止笑顔の彼女は  
一度も携帯を見なかった  
最初のデート以来のことだった

別れ際に重ねた唇 自分に行っているようで  
心は動かず 彼女の背中は遠ざかった

## 今日の夕飯

戸張雅登

肉の焼ける匂いで目を覚まし  
母に呼ばれてリビングへ駆け出す

少し焦げた薄い肉のかたまり

母が作ったハンバーグ

周りはカリッと中は柔らか

醤油味でミョウガ、シソ、ネギを添えて

食材を買い揃え、時間をかけて作ったのに  
ものの数分で平らげてしまうボク

前足で平皿を引き寄せて むしゃぶりつく

口の脇からもれる肉汁 タレを舌で舐めとり  
垂れたよだれを皿に残し さつさと小屋へ退散

手足を伸ばして身体を休めるボクに  
あんたまるで犬ね と母がいう



魂を招く

渡辺信二

櫻の影から見た  
あれは確かに おまえ  
天の方から うす紅色の  
水玉模様がこぼれて  
ころころ 転がり 空中に花びらとなつて開く

そんな この世の  
新しい姿になつて ああ  
どうかこちらにまた来てください

光と戯れながら  
花びらの はらはらと散る  
野原いっぱい  
生まれ変わったおまえを見ていたい

なおも おまえは おれの魂をかきむしるから

九月に逝く者へ

渡辺信二

森に入れば  
光がおまえを追って  
きらきら 戯れる  
川沿いを歩けば

雲が くいくい流れ  
野原を渡れば  
ときおり 風が激しく  
おまえの身体を揺する

いいね たまにはハイキングして  
不意に現れるお寺には  
御朱印帳も用意して

おれたち 夢の成就を  
共に誓った

あれは 辰の年始め  
その九月 おまえは逝った

遠いおまえ

渡辺信二

おれだつて 若いニーチェのように  
鶯色の夜 ゴンドラに乗つて  
遠くから聞こえる歌を  
おまえと一緒に聞きたかつた

それは 金色の雫が ときおり 風に舞い  
小舟やカンテラ リラの音が混じり合う頃  
きつと おれたち 互いの魂に浸されて  
目に見えぬ手に かき鳴らされただろう

ほんとうにそうだったならば  
おれたち きつと

喜びに尋ねるだろうね

この魂の歌に耳傾けた者が他にいたかどうか  
と

なお今も 思い 強く激しく  
遠いおまえが戻れと願う

## 花の精

渡辺信二

おれは二度 花の精を見た――  
あと六ヶ月と診断された病院からの帰り道  
おまえを正視できずに  
メトロの窓ガラスから盗み見た

そのとき ほの暗いガラスが背景となつて  
まるで 古代ローマ女性のテュニカ姿で  
ぼんやり白く青く ふわりと浮かぶ  
首元がぼつんと赤かった

二度目は 花に埋まつた死化粧のおまえに  
白くて青い姿が 重なるように  
ふわりと浮かんでいた  
赤い口紅を差した唇は 今にも花開きそうだった

おれは もう一度 あのメトロに乗って  
時間をさかのぼりたい

あれは 花の精を乗せたまま  
今でもごうごうと  
暗闇を突き進んでいるのだろうか

## 後ろ姿

——『風立ちぬ』にならって

渡辺信二

五年前 秋の森に入って  
おれたち ゆっくり散歩していた  
森は 絶えず木の葉を落とし  
枯れ葉がかさこそと鳴っていた

おれは ときどき 立ち止まって  
おまえを先に歩かせた

ただ おまえの後ろ姿を  
よく見たかった それだけだ

それだけなのだが はたして  
おまえの死を予感していたのだろうか

ただ ただ おまえを後ろから  
抱きしめたかった

あの小さな思い出が  
今もなお おれの心を締めつける



詩誌『立彩』第4号 2013年8月2日 頒価800円

編集発行 「立彩」

〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園 4-5-3

フェリス学院大学文学部英文学科 渡辺信二研究室気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311